

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494



船の話を書く

明けましておめでとうございます。本年は、広島・長崎に原爆が投下され、また第二次世界大戦が終結してちょうど五十年になります。

私も(財)第五福竜丸平和協会は役員・事務局一同それぞれに核兵器禁止と平和への決意を新たにしているところです。

ボスニア・ヘルツェゴビナ、チェチェン等での殺し合いを連日、テレビを通して見るにつけ、人びとの考え方を根本から変えるのはなんとむずかしいことか、人類がまだクリアできていない大きな壁があると、考えさせられます。

「戦争は人の心の中で生れるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」

というユネスコ憲章の言葉の重みを改めて痛感するしだいです。いまわが国で、考えなければならぬことも重要なテーマの一つは教育です。

それは広い意味での教育であり、長期的な視野に立った質の問題です。

平和教育はいうに及ばず、民族優越思想を克服できる国際理解・異文化理解教育、自然の魅力にふれさせる真の科学教育、等々多岐にわたっています。

自然と直接に接する機会、自分の手で観察・記録する機会、実物と対面して感動する機会などが、もっともっと提供されるべきだと思います。

学校教育にとどまらず、教育ボランティアとでもいうべきものが生まれ活躍することも期待されています。

このような全般的なニーズをふまえ、私たちが第五福竜丸展示館をより魅力的なものにするためにさらに努力したいと考えていますので、ひきつづき皆様のご支援・ご鞭撻をお願いするしだいです。

新年にあたって

第五福竜丸平和協会会長 川崎 昭一郎

今井正「ひめゆりの塔」「戦争と青春」、市川崑「ビルマの罅」。「野火」などを生んだ日本映画は久しく方向性の見えない状況で、西欧そして近年は、人間と歴史の掘下げや芸術的な映像の点で近隣のアジア映画に水をあけられ潜在的観客層を失っている。

ドキュメントものに、散発的に「一見」物があるだけで、テレビ台本：「私は貝になりたい」(フランクロー主演、後映画化。昨秋再テレビ化・所ジョージ主演)に迫る作品以上のものは久しく出ないのではないか。

演劇では、アングラがそれなりに人を集め手法・技巧的に先鋭化して衰退し、主催者の高齢化と

もに小劇場・大資本大仕掛けブームが去り、強いていえば「軽み・ひねり・えぐり」の時代の幕開けとは言えないだろうか。

劇団で言うと、問題意識を鮮明にした東京芸術座の芝居(東京大空襲・あわて暮やぶけ芝居/以下同じ)戦争問題や政治家・老人・外国人労働・医療など今日の問題を強烈な風刺の中に漂わせる東京春組(分らない国、もう大丈夫)、ニッポンの戦後・「国際化」を深いつまみから問ひかける現代座(熱い風、日本人よ元氣を出せ)、日本の演劇史の秀作・問題作を連続力演じている池袋小劇場(志村夏江・鮎)、弱者の側から戦争被害を訴え続けている地人会(夏の

終わりに)等、すぐれものが浮上してきている。

戦後五十年…これまでとこれからの「力」が確かめられる正念場である。あれやこれや考えていると文化の日に読売新聞が「憲法改悪」の旗振りの役が大々的に姿を現した。配られる「平和」とつくりあげる「平和」とのせめぎ合いの流れの中、都民にはノッピキない分分りやすくなったようだ。

東京大空襲体験・731部隊の体験発表、戦争の加害者側からの「遺言」等も通年に行われていく。否定的な逆流を乗り越えて埋もれた資料も歴史的な評価を得るだろう。

福竜丸展示館に行つて…若いカップル、親子連れ、高校生らしい仲良し、ふらっと寄つたみたいなの主婦・会社員、雨の日も風の日も、来館する人を負けない日はない。

本も紙芝居もマンガ(小学館 六年生)も「歴史の一ページ」ではなく人類の未来を啓示している『第五福竜丸展示館』。

歴史はだれがつくってきたか。広げていく(運動化していく)、知らせていく(運動化していく)、深めていく(運動化していく)、主体性を確かめていく(運動化していく)、運動化していく…これ自体がその存亡を決していくことになるのではないか。

かつてみんなが福竜丸に力を与え、彼女が廃船寸前に「夢の島」から甦ったように…。

ささやかながら「久保山忌句会」を十四年続けてきているが、この句会をどのように発展させ、俳句の仲間とその周辺の方達に広げるか、一人一人の参加者、作品の力、実行委員とその周辺に集う仲間、俳句というものも持っている文学性とその可能性、一市民一生活者一主催者としての有り様にかかっていると、改めて思う。

(久保山忌句会実行委員・新俳句人連名、東京都教職員組合所属 江戸川区在住)

島田興生写真展「還らざる楽園ビキニ」感想文ノートより

◇：豊かな地球の恵みが無残にも破壊される恐ろしさ、生き物の悲痛な訴えがきこえてくるようです。

◇：言葉で伝えるよりも写真を見る方がとても心にこわさがこみあげてきます。私たちのような小学生でもこうすることにによりよく伝わります。

◇：一見すると美しい海、空、それだけに生活続ける目標を

かり持てない彼らのいらだち、焦りのようなものを感じました。いま再び持ちあがった核廃棄処理場問題には怒りすら感じます。

◇：数十年前の出来事が今だに多くの人びとを苦しめているというところに圧倒されてしまいます。だからこそ、島田さんのような方々の努力も数十年にわたって生き続け、多くの人びとに光を与え続けると確信しています。

◇：テレビで幼い子どもの背骨のこぶを見て胸をつかれました。

大自然の豊かな恵みの中に生き生きと人間らしい生活を楽しんでいた人々が、一瞬核の爆発によってすべてを吹き飛ばされ、生存をおびやかされつつ生きていく姿を伝えた写真展の意義は深いと思います。

◇：夢の島にいつて写真展を見ようと新聞を見てずーと行ける日を探し、やっと今日親子できました。「つらい!」

◇：マイナーの存在を忘れる時民主主義は形骸化し発展しないのではないのでしょうか。

科学者の反省と責任

小川 岩雄

今年も広島・長崎の被爆から五十年目に当る。あの悲劇の歴史的意義や教訓、私たちに投げ掛けている課題は多岐にわたるが、誰もが考える一つの重要な疑問は、科学者はどうして原爆のような残虐で恐ろしい兵器を作り出してしまったのか、ということであろう。

同様の感想は、第五福竜丸展示館を見学して、水素爆弾の途方もない破壊力や、それが撒き散らす膨大な量の「死の灰」(放射性降下物)の有害な生物学的影響(放射線障害)について学んだ人々も持つに違いない。

確かに、核兵器をはじめ、それを目撃まで運ぶミサイル、それらを制御したり探知したりするための電算機やレーダーなどの関連機器はすべて現代科学、とりわけ物理学の最新の成果に基いて科学者が考え出し、高度に組織化された工学的手法に従って技術者が開発し生産してきた。

本来は自然現象の観測や実験、

理論解析などを通じて真理の探求を目指し、人類の共有財産としての文化に貢献すべき科学者や、その成果を駆使して人間社会に恩恵をもたらす、文明の進歩に寄与すべき技術者の多くが、一体どういう事情の下で、どんな動機や誘惑、衝動に駆(か)られて、こぞって「悪魔の手先」のような軍事的研究開発に走って来たのであろうか。

かつてノーベル物理学賞受賞者の湯川秀樹博士が「絶対悪」と呼んだ核兵器を地上から完全に抹殺し、日本国民の悲願である核廃絶を達成するということは、世界中の科学者・技術者が、誰一人としてこういう非人間的・破壊的な活動に携わらない、携わらせない世の中を実現することにはかならない、とさえ言えるであろう。

そのためには、科学者自身が核兵器開発の背景や、自分たちがあま、あるいは止むを得ず軍事研

究に関わるようになった経過や状況を、注意深く冷静に振り返ってみる必要がある。このような「診断」によって初めて「治療」すべき社会の「病根」が明らかになると思われる。

同時にまた、核兵器の原理やその作用、危険性などについて最も明らかなのは科学者であり、それだけに核兵器やそれに頼る国家権力の軍事政策に対して最も鋭い批判や警告が行なえるのもまた科学者だということになる。

実際、米国や旧ソ連でかつては原爆開発などに熱狂的に参加し、指導的な役割を演じてきた多くの科学者が、広島・長崎の惨害を知って強い衝撃を受け、戦後例えは水爆の開発などに勇敢に反対し、さまざまな抑圧や迫害を受けながら粘り強く活動を続けた例が少なくない。米国のアインシュタイン博士やオッペンハイマー博士、旧ソ連ではサハロフ博士などの活動がとくによく知られているが、その他にも各国、各分野の多くの科学者が協力して核軍縮への努力を重ねてきた。

むろん広島・長崎、ビキニと度重なる被爆体験を持つ我が国の科学者の果たした役割も無視できない。中でも核兵器を「必要悪」と

する米ソの「核抑止戦略」の誤りと弊害を論破し続けた湯川秀樹、朝永振一郎両博士ら理論物理学者のグループをはじめ、「死の灰」の分析に貢献した多くの化学者の功績は大きい。また終戦直後、廃墟の被爆地で身を挺して調査や治療に当たった仁科芳雄博士らの活動も脱帽に値する。そしてその背後には数十万人に及ぶ被爆者を始めとする国民の大多数の熱烈な声援と、マスコミ、とくに新聞の持続的なキャンペーンがあった。

こういう科学者たちが国際的な連帯と協力を求める中で誕生し、発展した有力な運動の一つが、一九五五年に発表されたラッセル・アインシュタイン宣言の呼び掛けで五十七年に発足した「バグウォット・シュ会議」である。今年も広島・長崎の被爆五十周年を記念して、七月にその第四十五回会議が「核兵器のない世界を目指して」を合言葉に広島で開催されることになり、成功が期待されている。

今後十二月まで毎号、ここで述べたような観点を中心に、半世紀にわたる核兵器問題の経過や、科学者の苦衷と模索、その背景などについて、私自身の思い出にも触れながら語ってみたい。

(立教大学名誉教授、本協会理事)

平和をめぐる教育文化状況・俳句・雑感

根元 撞音

水爆止めよ被爆の船を都心煙霧の端に置く 橋本夢道

「愛吉を助けて下さい」久保山君に母ありき 夢道

岡崎外相へ 媚態の言や「ビキニ以外に実験場もないだろう」 夢道

私たちの大先輩の夢道さんも見た。夢の島に打ち捨てられ廃船同然の第五福竜丸。それをこう詠んだ。運動をし続けたものとしての歴史的な視線は確かである。人間として切羽詰まったところで芸術を考えていることが伝わってくるようだ。昨年十一月に没後二十年記念の「月島と妻を愛した展覧会」が徳島生まれの夢道さんの永住した月島で開かれ、同じ新俳句人連名の会長を三十年以上もつとめられた古澤太穂氏が『ほんりゅう』誌に一文を寄せている。氏自身にも「江東区は存して秋の雨波紋」『ビキニ以後も界限を守る梅雨の裸灯』をはじめ多くの久保山忌の作品がある。

いち早く平和教育の実践をし江東教組の教師が「夢の島の白い船」という冊子を制作して、東京大空襲を記録する「聞き書き」「体験記」の『炎の街』『町は火の海』(何れも再版)を刊行し、みのべ革新新政を生んで行く中での「東京大空襲を記録する会」の催物に結実している。

「平和教育々々、平和々々とあまり言わなくてもいいのでは……」最近、教職課程履修大学生の「平和意識」のサメタ傾向が現出している、ということを身近な知人から聞いた。在日の問題を追求した『渡り川』の制作、高知の福竜丸以外の被爆船を追った記録、一輪車での日本縦断被爆者援護法・核兵器廃絶を求める署名活動、朝鮮人遭難犠牲者の実態を探った千葉の高校生・大学生等が、前記の大学生たちの対極になるのではなく、先導的な役割を果たすような土壌づくりが必要なのだろう……。

文部省の一定の「模様替え」と「平和」という名の新たな攻勢が

ある。

教科書の話で言うと、憲法・教育基本法を背景にした教科書検定違憲「家永」裁判の反映もあって平和教材は義務教育の教科書にも一定量ある。落語の「子ほめ」が、テレビ台本「北の国から」が義務教科書の片隅にでも載れば「学校生活が楽しくなる」(かのような)ニュースになるが、市民運動を反映した教材は日の目は見ない。高校の教科書に井伏鱒二氏の「黒い雨」は出るが、昨今ノーベル賞授賞・文化勲章拒否の大江健三郎氏の「ヒロシマ・ノート」は載らない。

載ってはいても半開きや空襲・B29の資料の「粗略さ」は超特級で、作者の周辺だけ、書名だけの紹介位。感性や視覚に訴え、認識にまで高めるような資料、疎開児童の概数・主な疎開先、被爆状況すらも、地図さえも教師用資料には載らない、載せない、載っていない……。

歴史的なアジア諸国への侵略とアメリカの軍事的侵略性の軽視はだれも指摘できることである。「男はつらいよ」にも出たことのある演劇人・米倉喬加年氏の『大人になれなかつたおととたちへ』は、教科書に付随した資料で作者

の補足・自注までつけさせておきながら、原典の「あとがき」すら載せない/作者に「……いい先生は『あとがき(アジア諸国を侵略したという簡潔な表現)』の部分を生徒に伝える……」と言わせている例まである。

言葉遊びの側面を持つ俳句・短歌、川柳などでは、高校が一番自由で楽しくおいしそうな教材があり、小学校段階の内容が難しい教科書のに最困難。非科学的説明の文章や視点をずらして環境破壊の元凶に言及しないようなものが「新教材」の看板でバッコしている状況もある。

文部省の人づくり政策「コンピュータ時代の三割理解だけでいいという人間性無視の「新」学習指導要領、新しい時代の酒を入れられない古い皮袋……こいつはたものは「リクルート事件」で汚れて地に落ち破綻しつくしているものである。一方では、「文弥ありらん」時代の事象や人間像・時代そのものの本質を見据えた作家・研究者達の存在と真価が問われる時がすぐそこに来ているのではないかととも思う……。

シナリオや監督作品としては新藤兼人の「原爆の子」「第五福竜丸」、黒沢明「生きものの記録」、